

## 4-1-6-10 耳鼻咽喉科

### 1. 概要、特色

#### 1.1 概要

2002年3月1日、国立小児病院と国立大蔵病院の統合により開設された「成育医療センター」耳鼻咽喉科では、従来の小児耳鼻咽喉科疾患に加えて、成育医療および周産期の耳鼻咽喉科疾患も対象として診療が行われることになった。小児耳鼻咽喉科の一般的疾患としての中耳炎（滲出性中耳炎、急性中耳炎、慢性中耳炎）、アレルギー性鼻炎、慢性副鼻腔炎、咽喉頭炎・扁桃炎などから、高度専門医療センターとしての本来の役割と考えられる、小児難聴の診断・治療・早期療育、上気道での呼吸障害の診断・治療（幼小児の睡眠時無呼吸症候群、声門下狭窄、声帯麻痺等）、頭頸部腫瘍性疾患あるいは先天奇形疾患の診断と治療まで、その対象は広範囲に及んでいる。

2005年度の年間延べ外来患者数は9,702名、延べ入院人数は3,224名、延べ手術患者数は646名であり、3名の耳鼻咽喉科常勤医師および1名の耳鼻咽喉科レジデントが、総合診療部や手術集中治療部をはじめとする関連各科と綿密な関係を保ちながら診療にあたっている。今後は研究所と連携しての高度先進医療が求められるものと考えている。

#### 1.2 スタッフ

3名の常勤医師および1名のレジデントが診療を担当している。

第二専門診療部長：川城信子

耳鼻咽喉科医長：泰地秀信

耳鼻咽喉科医員：守本倫子

耳鼻咽喉科レジデント：飯ヶ谷七重

### 2. 診療活動

#### 2.1 外来部門

耳鼻咽喉科外来は、(月)(水)(金)の午前午後、3H-1 および3H-2 診察室で2診体制で行っている。2005年度の1日平均(週5日間として)の外来患者数は39.9名である。診療予約制を採用しているため、初診の予約待ちが起り、救急時には適宜対応しているとはいえ迅速な対応が求められる疾患の診療が行いにくいという問題が生じている。適切な診療を行うために、近隣および紹介元の医療機関と連携をとるよう努めている。外来診療での疾患の推移をみると、耳疾患が増加傾向にあり、小児難聴の診断・治療・療育には今後も力を入れていく予定である(2005年7月にASSR検査を導入)。専門外来として「難聴・補聴器」「気道疾患」の各外来を開設しているほか、2002年秋からは形成外科、リハビリテーション科、言語訓練部門と合同で「口蓋裂チーム外来」を行っている。

「難聴・補聴器」外来：毎週月曜日の午後(担当：守本)および水曜日の午後(担当：川城、泰地)に、難聴児の診断および補聴器の適合・装用指導を行っている。当院は補聴器適合検査および更生医療の指定医療機関になっている。当院の常勤医師3名はすべて日本耳鼻咽喉科学会の補聴器相談医に認定されている。また院内および院外の施設での言語訓練指導も推進している。

「気道疾患」外来：毎週金曜日の午後(担当：守本)に、主に気管切開を行った患者および気管・喉頭形成術後の患者のフォローアップ外来を行っている。対象患者は全国に及び、約50名の患者が定期的に受診している。

「口蓋裂チーム」外来：毎月第4金曜日の午後、口蓋裂術前・術後患者の構音評価を中心とした外来を形成外科他と合同で行っている。

#### 2.2 入院部門

耳鼻咽喉科入院患者は、予定手術症例が主体であり、7階西および東病棟(幼児)および10階東病棟(学童)を中心に、状況に応じて他の病棟も利用しながら入院患者の治療を行っている。2005

年度の1日平均の入院患者数は8.8名、平均在院日数は5.9日であった。夏休み期間中や緊急入院が続いた際には入院患者が20名を超える日もある。病棟患者で、全身的な合併疾患をもつ患者の場合には、総合診療部のバックアップを得て診療を行っている。また耳鼻咽喉科領域の急性感染症・外傷などで、保存的治療を行う場合には、総合診療部が主な担当（主治医）となって、局所の診療について耳鼻咽喉科がサポートするという体制をとっている。

### 2.3 手術部門

2002年3月26日に、耳鼻咽喉科として成育医療センターでの最初の手術、「鼓膜チューブ留置術」1件を行った。2005年度は月間44～63件の手術を行っている。2005年度の耳鼻咽喉科手術の詳細を下表に示した。他の小児専門病院と同様に、アデノイド・扁桃手術および鼓膜チューブ留置術が多い。気道疾患の手術も多いが、他院でも扱うようになってきているためかやや減少傾向にある。頭頸部腫瘍の手術は増えてきている。小児の中耳手術も当院の機能を生かした重要な診療と考えている。“その他”はほとんどが全身麻酔下にASSR検査および補聴器適合検査を行った症例である(2005年10月より開始)。

耳鼻咽喉科手術の内訳(2005.4～2006.3)

	2005										2006			合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
患者数	53	52	54	44	63	54	48	51	50	56	61	60	646	
<術式別>														
鼓膜チューブ留置	20	27	28	14	30	27	16	19	27	27	26	18	279	
鼓室形成	3			5	8	1	2	2	1	2	1	8	33	
鼓膜形成	2		1		2		1				1		7	
耳瘻孔/副耳	1	1	1	2	3	2	1	1	1	2	1		16	
外耳道閉鎖症手術							1						1	
アデノイド	18	16	19	12	19	19	17	11	13	20	25	12	201	
扁桃摘出	17	14	16	13	18	22	19	10	17	22	20	16	204	
舌小帯切除		1	3				2	1	1				8	
舌根のう胞		2									1		3	
後鼻孔閉鎖	1		1									2	4	
喉頭 検査/手術	5	8	4	6	1	1	3	3		2	4	11	48	
喉頭気管形成術/分離術			1										1	
気管切開	2	2	1	2		1		1		1		1	11	
下甲介/鼻中隔手術			3	1	2			1	1	3		3	14	
鼻副鼻腔内視鏡手術	1	1							3		2	3	10	
顔面/口腔/頸部腫瘍手術	2			1	2	4	2	5	2	3	5	1	27	
頭頸部悪性腫瘍手術		1				2							3	
異物(食道、気管など)	2									1		1	4	
その他							6	6	1	1	1	1	16	
計	74	73	78	56	85	79	70	60	67	84	87	77		

同一患者で複数の術式が施行されていることあり。

## 2.4. その他

新生児聴覚スクリーニング：周産期部門により、全新生児の聴覚スクリーニングを行っている。すでに2000件以上のスクリーニングが行われており、スクリーニングにて難聴の疑いありと判定された新生児は、耳鼻咽喉科でさらに精密な聴力評価を行い、難聴児の早期発見を目指す体制が構築されている。当院は日本耳鼻咽喉科学会により新生児聴覚スクリーニング後の精密検査機関に指定されており、ABR・ASSR・OAE・行動聴力検査（COR, peep show 検査など）の乳幼児聴力検査が可能である。

医療連携（病診連携）：小児専門施設として、多くの診療所や病院はもちろん、大学からの紹介患者も数多く受け入れている。本年度も、医療連携室が窓口となり、急性感音難聴、外傷、後鼻孔閉鎖症等の疾患を数多く受け入れ、迅速な治療を行うよう努めた。

## 3. 研修、研究班活動

### 3.1 研修

- ・ 2005年4月13-15日 日本聴覚医学会主催“聴力測定技術講習会”に講師として協力（川城、泰地）
- ・ 2005年7月2-3日 日本耳鼻咽喉科学会主催“全国身体障害者福祉医療講習会”に講師として協力（泰地）
- ・ 2006年1月14-15日 “「日本耳鼻咽喉科学会補聴器相談医」委嘱のための講習会”に講師として協力（泰地）

### 3.2 研究班活動

- ・ 成育医療研究委託事業“新生児・乳幼児難聴の診断および療育に関する研究”班（17公-3）主任研究者（泰地） 分担研究者（川城）
- ・ 平成17年度 政策医療ネットワーク共同研究“乳幼児難聴の診断・療育と言語発達に関する研究” 主任研究者（泰地） 分担研究者（川城、守本）

## 4. 社会的活動

### 4.1 ろう学校との連携

近隣のろう学校と随時カンファレンスを行い、活動を支援。

### 4.2 日本耳鼻咽喉科学会関連

日本耳鼻咽喉科学会 福祉医療委員として学会の福祉活動に協力。東京都地方部会の活動を分担（経理部会長、乳幼児医療委員会）。

### 4.3 日本聴覚医学会関連

日本聴覚医学会の編集（Audiology Japan 編集委員長）および広報（委員）活動を行い、聴覚医学の推進・啓蒙に協力。

### 4.4 日本小児耳鼻咽喉科学会関連

日本小児耳鼻咽喉科学会の運営を分担（庶務、編集）。

### 4.5 国立医療学会関連

国立医療学会の会誌“医療”の編集に協力（編集委員）。

### 4.6 日本気管食道科学会関連

日本気管食道科学会の認定施設として2005年認定され、任務をになった。